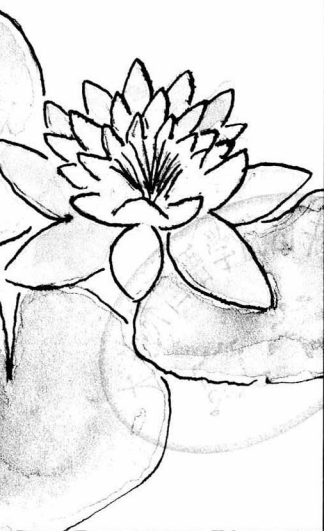
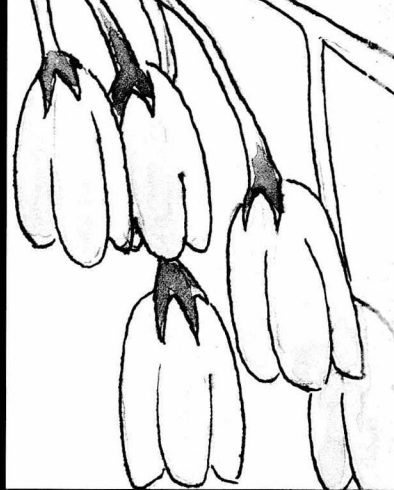


佐伯恵達

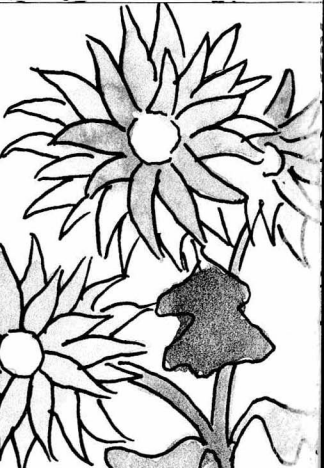
万葉集と仏教思想

古代インド語でわかる万葉歌





万葉集と仏教思想
古代インド語でわかる万葉歌



佐伯恵達

鉾脈社

佐伯恵達 (さえき・えたつ)

1924 (大正13) 年に生まれる。

1934 (昭和9) 年、9歳のとき得度して、仏門に入る。

1944 (昭和19) 年、学徒出陣 (特甲幹)。

1951 (昭和26) 年、龍谷大学文学部研究科 (大学院)

卒。同年より34年間、宮崎県県立高校に勤務 (宮崎大宮・宮崎南・宮崎東通信制)。宮崎女子短期大学講師を経て、現在、宮崎看護専門学校、宮崎リハビリテーション学院講師。本願寺輔教。長昌寺住職。

1975 (昭和50) 年、ヨーロッパ5ヶ国 (オーストリア・西ドイツ・チェコスロヴァキヤ・イギリス・フランス) の教育事情視察。

著書 「漢文の基礎」 (昭和印刷)

「廃仏毀釈百年」 (鉾脈社)

「色は匂へど」 (鉾脈社)

論文 「荀子の性悪説について」

「曇鸞の焚燒仙教事件について」

(九州中国学会) など

現住所：宮崎市大字郡司分甲317番地 長昌寺

万葉集と仏教思想 — 古代インド語でわかる万葉歌

1992年9月1日初版印刷

1992年9月10日初版発行

著者 佐伯恵達

発行者 川口敦己

発行所 鉾脈社

宮崎市田代町263番地 TEL (0985) 25-1758

定価 1,500円 (本体1456・税44円)

© 佐伯恵達 1992年

印刷・製本／有限会社 鉾脈社・日宝綜合製本株式会社

落丁、乱丁本がありましたら、お買求めの書店もしくは発行所にてお取替えいたします。

序

『万葉集』は天平年間を中心とする仏教文化最盛爛熟期の所産であります。にもかかわらず、ほとんどの万葉研究家の間では、「万葉集は仏教の影響はほとんどなく、あってもきわめて少なく、集中の仏教色の濃い歌は仏門に關係している人の歌か、あるいは漢字漢文の素養のある知識階級の人の歌に限られている。」と言われています。が、それは全くナンセンスなことです。漢字漢文の素養のない人がどうして漢字ばかりの歌を作ったのかと反論したくもありませんし、知識階級の人の歌に限られるとすれば、万葉集のほとんどが無知識人の歌ということにもなりかねません。しかし、それが通説となっているのです。

なぜこのように仏教が曲解され、万葉集から仏教が無視されてきたのでしょうか。

天平宝字三年（七五九）、因幡国庁での大伴家持の歌を最後とする万葉集は、百九十三年後の天歷五年（九五二）十月三十日、昭陽舎で清原元輔・源順らによって、その頃すでに読めなくなっていた「万葉仮名」に訓点を施す作業が行なわれたのでした。

それから約三百十数年の間、諸国興亡の戦乱のため万葉集は一部の関係者を除いては地下の存在で日の目を見ることはなかったのです。それをはじめて組織的に解読研究し、人々に親しまれるようにしたのは、天台宗の僧、権律師仙覚（二〇三〜二七二）でした。仙覚は二十三歳から『万葉集』を研究し、その業績は多大で、とくに文永六年（二六九）四月二日完稿の『万葉集註釈』は高く評価され、後学の人々に広く影響を与えています。

それからまた四百十数年、江戸中期の真言宗の僧、契沖阿闍梨（二六四〇〜一七〇二）が出て、徳川光圀の依頼により、親交のあった下河辺長流に代って貞享四年（二六八七）、『万葉代匠記』を著わし、近世古典学研究の祖とあがれています。

そして約三百年、平成の現代があるのです。思うに『万葉集』の読解の基礎は僧侶の貢献が大なのです。それはとりもなおさず仏教文化の粹としての万葉歌のよき理解は、仏教を理解することであつたからにはありません。

ところが、現代の古典としての万葉研究家のほとんどは、自覚のあるなしにかかわらずその源を江戸末期からの「古学」、特に明治からの「国学」に流れを汲んでいるのです。それは、「古学」「国学」という名のもとに、仏教や儒教に対立してそれを排斥し、『古事記』や『万葉集』の言葉をすべて日本列島の中で、皇室を中心として、ひとりでに生まれたかのようにはめかして、無理にわが国独特の精神・文化を究明しようとする態度からぬけ出そう

としないのです。そのため万葉研究は天皇中心の国体の精華を発揮するという国粹主義の政治の方針によって、日本の古代史や日本語の起源を神秘化するいわゆる「民族学」・「国学」となっていました。

学校教育でも、古典は「暗記もの」として取り扱われ、生徒の科学的、比較言語学的な発想や批判などは許されず、情操的な心の問題にふれる余裕ありませんでした。とにかく暗記しなければ大学入試に落ちることになるのですから。

従って万葉の学習研究は、やたらと神秘的になって、万葉時代は生死未分化の古代信仰の時代で、山を亡き人の実在と信じたとか、死体の醜悪や恐怖をはげしく持ったとか、魂たまごいの呪術の歌であるとか、当時の民族信仰から変死人の靈魂たまの崇りを恐れた鎮魂たまの歌であるとか、などなど、むやみに七・八世紀の飛鳥・白鳳・天平時代の文化人たる万葉びとを、有史以前の原始人としてとらえ、そこには大陸文化の影響も、仏教的生死観に立つ教養も、大唐長安に模倣されたすばらしい殿堂や街なみの生活もなかったかのような見当ちがいと時代錯誤が堂々となされ論じられているのが現状です。

だから、有史以来、真の日本文化を養い育ててきた大陸思想や仏教思想を、国学の禁域として万葉研究の埒外うちに置いてこれを排し、ましてやインド語や大陸語や朝鮮語（特に百濟語）などの外来語が日本古代語となっていることにふれようものなら、邪道として白い眼で見ら

れることになるのです。

しかし、最近になって、ようやく学習研究も比較的的自由になり、『古事記』や『日本書紀』の記述の中に、大陸思想をはじめとして古代朝鮮語やインド語などが多用されていることが注目されるようになりました。『万葉集』も同様なことが言えます。仏教思想はもちろん仏典の引用をはじめとして、古代インド語の使用もまたその例にもれないのです。

思うに、万葉の時代は、推古二年（五九四）二月一日、「仏教興隆の詔」が下され、その担い手である聖徳太子からはじまります。冠位十二階の制定、十七条憲法の制定、曆の採用、遣隋・唐使の派遣、法隆寺の建立、三経義疏の著述、そして『天皇記』・『国記』（散逸したとされている）が編集され、『日出づる国の天子』の治政ははじまるのです。やがて大化改新となり、薄葬令が発せられて厚葬・殉死は禁じられました。

対外的には、唐・新羅、そして百済と外交めまぐるしく、白村江の戦いに敗れて（六六三）数万にも及ぶ百済人の帰化、そして東国移住、こうした情勢下に対唐・新羅防備として筑紫には水城が築かれ、防人が置かれたのでした。防人の歌には無常観的悲壮感がただよい、雅語や百済語が用いられているのも、そうした帰化人の高い教養によるものです。

近江朝をへて壬申の乱もおさまり、沙門（僧侶）たる天武天皇（『日本書紀』持統条）の浄御原治政となり、唐文化の影響をうけ新興の気風にあふれ、仏教美術や学芸のすぐれた白鳳文

化はおとずれます。和歌が発達して万葉の優れた歌人が輩出するのもこの頃からです。

和銅三年（七二〇）三月十日、長安を模した壮大な平城京への遷都が実施され、世を挙げて大陸文化の爛熟の中で、はじめて『古事記』（七一二）そして『日本書記』（七二〇）が撰上されたことも、わが国の歴史にとって大変意義あることです。

神亀四年（七二七）頃から日本海を経て直接大陸の渤海国との交流が盛んだったことも見のがせません。漢の武帝（紀元前一五九〜八七）が李夫人の死後、魂を呼びかえそうとして香をたき、その煙の中に面影を見たという「反魂香」の故事は、そのまま日本海岸の越中富山の漢方薬「反魂丹」として残ったのもその一例でしょう。

僧侶としての法号を「沙弥勝満」と号された聖武天皇や光明皇后を中心とした仏教篤信を反映して大陸との交流はますます盛んとなり、天文・地学・学問・芸術をはじめ施薬や医療の社会福祉にいたるまで、そのまま東海の仏教国として進展してゆきました。世にこれを天平時代と言うのです。

万葉後期の大イベントは何といっても天平勝宝四年（七五二）の東大寺大仏開眼供養でした。くわしくは本文をお読みください。その余慶に浴して、天平宝字三年（七五九）元旦、家持が「いや重け吉事」と、万葉の世代を寿ぎ祝った歌を最後として『万葉集』は終りを告げるのです。

以上、万葉の歴史的な背景をべつしてきましたが、仏教を基調とし、渡来人の参加による大陸模倣の飛鳥時代からはじまり、唐文化を移入し仏教美術は隆盛し、和歌が発達して初期の万葉歌人が輩出した白鳳時代、そしてそれを基礎として皇室の仏教信仰と実践を反映して開化し、万葉歌人の集中する、仏教色の濃い世界性豊かな天平時代となります。このように、万葉の時代は三大文化の時代であって仏教をぬきにして語ることはいけません。このよう
「故きを温ねて新しきを知る」という言葉があります。古い知識の系統的な片寄らない理解の上に立って、将来を見通す新しい知見が得られるという点では、万葉歌ほどすばらしいものはないように思います。天平の世から約千三百年、世はまさに国際化の時代であります。万葉歌もその一役をかりる時代がおとずれているようです。しかし、万葉への道は遠くけわしいものです。同時にその道は辿り行くに従って親しみを増す春の道でもあります。私たちの遠い先祖の残してくれたこの遺産を大切に万葉びとの心の琴線にふれ、従来のいわゆる古典学の枠に左右されることなく、自由にしかも正しく読み解くことが私たちの責務でもあろうかと思っております。

佐伯 恵達

万葉集と仏教思想
目次

序

1

第一部 無常篇

29

〔一〕 無常の巻

31

(1) 厭離穢土

33

1 生死の二つの海を

(卷十六・三八四九)

三

2 世間の繁き借廬に

(卷十六・三八五〇)

三

3 心をし無何有の郷に

(卷十六・三八五二)

三

(2) 一期一会

36

4 御民吾生ける験あり

(卷六・九九六)

三

5 み吉野の象山の際の

(卷六・九二四)

三

6 ぬばたまの夜のふけぬれば

(巻六・九二五)

元

7 春の野にすみれつみにと

(巻八・一四二四)

元

(3) 慈愛 (いつくしみ)

8 家にあらば妹が手まかむ

(巻三・四一五)

四

9 母父も妻も子どもも

(巻十三・三三四〇)

四

10 浦潭にこやせる君を

(巻十三・三三四一)

四

11 愛し妹をいづち行かめと

(巻十四・三五七七)

四

(4) 天地無常

12 斯くしつづ遊び飲みこそ

(巻六・九九五)

四

13 世間を常無きものと

(巻六・一〇四五)

四

14 三香の原久邇の京は

(巻六・一〇六〇)

四

15 言問はぬ木すら春さき

(巻十九・四一六二)

四

16 世間は空しきものと

(巻三・四四二)

四

17 こもりくの泊瀬の山の

(巻七・一二七〇)

四

18 鯨魚取り海や死する

(巻十六・三八五二)

四

(5) 木にも兄弟・鳥にも心

- 19 言問はぬ木すら妹と兄 (巻六・一〇〇七) 五
20 明日香川七瀬の淀に (巻七・一三六〇) 三
21 夕されば小倉の山に (巻八・一五一二) 三
22 さしなべに湯沸かせ子ども (巻十六・三八二四) 四

(6) 消やすきいのち

- 23 世の中は常かくのみか (巻七・一三二一) 五
24 朝霜の消やすき命 (巻七・一三七五) 五
25 朝霧の消易きわが身 (巻五・八八五) 六
26 臨終らむとする時 (巻五・八八六〇九一の序) 六
27 一世には二たび見えぬ (巻五・八九二) 六
28 世間は数なきものか (巻十七・三九六三) 六

(7) 蟬のぬけがら

- 29 虚蟬の代は常なしと (巻三・四六五) 三
30 うつせみの常なき見れば (巻十九・四一六二) 四

(8) 水沫のごとし

65

31 巻向の山べとよみて

(巻七・一二六九)

奎

32 もののふの八十字治河の

(巻三・二六四)

癸

33 水の上に数書くごとき

(巻十一・二四三三)

癸

34 塩気立つ荒磯にはあれど

(巻九・一七九七)

癸

35 水沫なすもろき命も

(巻五・九〇二)

癸

(二) 流転の巻

70

(1) 生

71

36 寺寺の女餓鬼申さく

(巻十六・三八四〇)

三

37 この川に朝菜洗ふ児

(巻十四・三四四〇)

三

38 天地は広しといへど

(巻五・八九二)

三

(2) 転生

76

39 なかなか人にあらずは

(巻三・三四三)

三

40 今の代にし楽しくあらば
41 なかなか人にあらずは
42 世のなかをうしと思ひて

(卷三・三四八)
(卷十二・三〇八六)
(卷十三・三二六五)

六 五 六

(3) 老

43 手束杖腰に束ねて
44 天なるや月日のごとく
45 死なばこそ相見ずあらめ
46 白髪し子らもお生ひなば

(卷五・八〇四)
(卷十三・三二四六)
(卷十六・三七九二)
(卷十六・三七九三)

六 三 三 四

(4) 病

47 古人の食へしめたる
48 況はむや我胎生せしより
49 術もなく苦しくあれば

(卷四・五五四)
(卷五・寛永版本三三三丁)
(卷五・八九九)

六 七 九

(5) 死

50 生者つひにも死ぬる
51 沖つ波来よる荒磯を

(卷三・三四九)
(卷三・二二二)

六 九

52 鴨山の岩根しまける

(巻三・二三)

三

(6) 不帰の人

94

53 別れてもまたも会ふべく

(巻九・一八〇五)

四

54 あしひきの荒山中に

(巻九・一八〇六)

五

55 世間を何に譬へむ

(巻三・三五二)

六

(二) 葬送の巻

98

(1) 天皇の葬儀

98

56 天の原ふりさけ見れば

(巻二・一四七)

一〇〇

57 青旗の木旗の上を

(巻二・一四八)

一〇一

58 人はよし思ひ止むとも

(巻二・一四九)

一〇四

59 うつせみし神にたへねば

(巻二・一五〇)

一〇六

60 かからむの懐知りせば

(巻二・一五一)

一〇八

61 やすみしわご大君の

(巻二・一五二)

一〇九

62 いさな取り淡海の海を

(巻二・一五三)

一一一

- 63 ささなみの大山守は (巻二・一五四) 一二
 64 やすみししわご大君の (巻二・一五五) 二三

(2) 火葬

- 65 隠口の泊瀬の山の (巻三・四二八) 二五
 66 山のまゆ出雲の児らは (巻三・四二九) 二六
 67 秋津野に朝る雲の (巻七・一四〇六) 二七
 68 ま幸くといひてしものを (巻十七・三九五八) 二八
 69 昨日こそ君は在りしか (巻三・四四四) 二九
 70 いっしかと待つらむ妹に (巻三・四四五) 三〇

(3) 散骨

- 71 鏡なすわが見し君を (巻七・一四〇四) 二三
 72 秋津野を人の懸くれば (巻七・一四〇五) 二四
 73 玉梓の妹は珠かも (巻七・一四一五) 二五
 74 玉梓の妹は花かも (巻七・一四一六) 二六

(4) 行き倒れ

127

121

114